自ら形や色、表現方法などを考え
自分らしい表現を追求する児童の育成

―― 絵に表す題材における「図工の種集め」を通して ――

長期研修員　　佐藤　潤子

《研究の概要》

本研究は、図画工作科の絵に表す題材において、形や色、表現方法などを自己決定し、自分らしい表現を追求する児童の育成を目指したものである。そのための手立てとして、思いのままに試す活動と活動の中で気付いたことを共有する活動で組み立てる学習活動「図工の種集め」を提案する。この「図工の種集め」によって多様な表現方法に気付いたり効果的な表し方を実感したりし、その後の表現において自己決定を繰り返しながら自分らしい表現を追求していくことに有効であることを、授業実践を通して明らかにした。

キーワード　【図画工作　絵に表す　試しの活動　共有する　自己決定】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｇ０５－０７　平成２９年度　２６３集

Ⅰ　主題設定の理由

小学校学習指導要領解説図画工作編（平成20年３月公示）の図画工作科改訂の要点では、「教科の目標では,『感性を働かせながら』を加え，児童が，感性を働かせながら，つくりだす喜びを味わうようにするとともに，造形的な創造活動の基礎的な能力を育成することを一層重視する」としている。この「感性を働かせながら」という文言が加えられたことにより、児童の感覚や感じ方、表現の思いなどを一層重視することを明確に示し、表現や鑑賞の活動に取り組むことが強調されている。

群馬県においては、「平成29年度学校教育の指針（解説）」の図画工作、美術の指導の重点の一つに「思いを深めたり意欲を高めたりする個別指導の充実」を挙げ、その中で、次の点について重要性を示している。一つは、心に浮かんだイメージを具体化したり、表したいことに対する思いを深めたりすることである。もう一つは、児童自身に語らせたり、児童自身に自己決定させたりしていくことの重要性である。表現する喜びは、自分の思いが表せたと実感できるような過程を伴って感じられるものである。その上で、児童が表したいことを見付け、自己決定を繰り返しながら主体的に表現を追求していくことが、自分らしい表現につながっていくと考える。そのための指導方法としては、試しの場を設定することを重点としており、表現方法、配色、配置、用具の扱い方などを試す体験で得たことを基に、表したいことを見付ける力や構想を練る力が育成され、感性を働かせながら自分らしい表現ができることを示している。そして、このように自らが主体となって試行錯誤しながら表現を追求していく問題解決的な学びは、小学校学習指導要領（平成28年３月公示）の改訂においても一層重視されている。

所属校には、図画工作に興味・関心が高く意欲的に取り組める児童が多い。しかし、自らが主体となって試行錯誤しながら表現を追求するという点にはやや弱さがある。それは、表したいことを発想したり、表し方を構想したり、工夫して表したりするそれぞれの場面で、自己決定するための選択肢を十分に持ち合わせていないことが主な要因と考える。活動の中で何をどのような色で表すことができるのか、モチーフの配置としてどのような工夫ができるのか、どのような技法がありどのような特徴があるのかなど、形や色、表現方法などを多様に思い起こせなければ、自ら選択し表現を追求していくことは難しい。そこで、自分の感覚で直接味わいながら試したりつくり直したりして発想を膨らませるきっかけやアイデアを蓄える時間を設けたり、過去の体験を思い起こさせたりすることで、児童が選択肢を多様に持ち自己決定できるようにする指導が必要と考える。そして、このことが自分らしい表現を追求し、つくりだす喜びを味わうことにつながると考える。

しかし、このような時間を十分に設定できていないことが現状としてある。絵に表す題材では、一斉指導が比較的容易な描画法による画一的な指導や、逆に、児童に全てを任せてしまう放任的な指導も見受けられる。それは、教師が児童に思いを膨らませたり、表現方法などを選択させたりするための指導方法を理解していない、あるいは苦手意識を持っているからではないかと考えた。

以上のことから、絵に表す題材において、児童が発想を膨らませるきっかけや、思いや願いを具現化しようと表現を自己決定していくための選択肢をたくさん持てるようにすれば、自ら形や色、表現方法などを考え自分らしい表現方法を追求することにつながるであろうと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

絵に表す題材において、形や色、表現方法などを考え自分らしい表現を追求できるようにするために、試す活動と気付いたことを共有する活動で構成した「図工の種集め」を取り入れることの学習過程における有効性と効果的な組立について明らかにする。

Ⅲ　研究仮説（研究の見通し）

本研究では「図工の種集め」を次の二とおりとし、学習過程への位置付けに応じて使い分ける。

○　思いのままに試す活動、見付けたことを共有する活動の二つの活動で組み立てる。

○　思いのままに試す活動、見付けたことを共有する活動、共有したことを基に試す活動の三つの活動で組み立てる。

このことを前提として、二つの活動で組み立てた場合は以下の仮説１、２までを検証し、三つの活動で組み立てた場合は１、２、３を検証することとする。

１　自分の感覚で直接味わいながら形や色からイメージを広げたり様々な表現方法を見付けたりすること（「図工の種集め」思いのままに試す活動）

思い付いたことや表現方法を思いのままに試す活動を設定することで、自分の感覚で直接味わいながら、形や色などからイメージを広げたり様々な表現方法を見付けたりすることができるであろう。

２　体験で得たものを整理し、新たな表し方に気付くこと（「図工の種集め」見付けたことを共有する活動）

試した中で見付けた形や色、表現方法などを共有する活動を設定し情報を整理・分類することで、体験で得たものを整理し、表現方法を広げたり認識を深めたりすることができるであろう。

３　多様な情報を基に構想を練ったり、自分の思いに近付けるために表し方を工夫したりすること（「図工の種集め」共有したことを基に試す活動）

共有したことを基に目的を持って取り組む活動を設定することで、多様な情報を基に自分の思いに近付けるために表し方を工夫することができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　文言の定義

(1)　本研究で目指す自己決定の捉え

絵に表す題材において、児童は、何をどのような色彩で表すか、モチーフをどのような配置で表すか、どのような技法をどの部分に用いるかなど、形や色、表現方法などを決めていく。その場面において、何を描き加えたらより良くなるかを考えて表現を付け足したり、自分の思いを表すために表現方法を選んだりするなど、試行錯誤を伴いながら自己決定していくことでより良い表現になっていく。この思いや願いを具現化することに向かって、試行錯誤を伴いながら形や色、表現方法などを主体的に決めていく児童の姿を、本研究では自己決定と捉える。そして、この自己決定を積み重ねた表現が自分らしい表現につながっていくと考える。

(2)「図工の種集め」について

①　「図工の種集め」の目的

自己決定するには表現の手掛かりが必要となる。本研究の手立てである「図工の種集め」とは、表現の手掛かりを集めるために、試す活動と気付いたことを共有する活動で組み立てた一連の学習活動である。

②　「図工の種集め」を設定するタイミングについて

絵に表す題材の中で自己決定を求められる場面は、主に次の場面と考える。

○　できそうなことを思い付く場面

○　構想する（下絵に表す）場面

○　表現方法を選んで表す場面

これらの場面で表現の手掛かりを持ち合わせていなければ、試行錯誤を伴った自己決定にはなりにくい。そこで、手立て「図工の種集め」は、これらの場面の手前に設定する。

③　「図工の種集め」の組立について

「図工の種集め」では、その後の活動で自己決定する上で、イメージや表現方法を広げていくことと構想を深めていくことの、どちらを目的とするかを考え組立を変えることとした。

イメージや表現方法を広げていくことを目的とする場合は、以下の二つの組立とする。

○　思いのままに試す活動

○　見付けたことを共有する活動

例えば、表現方法に初めて出合い、その面白さなどから発想して絵に表す題材では、児童は多様な表現方法に触れることでどのようなことができるか考えたり、自分では気付かなかった表現方法を取り入れて工夫したりする。このような場合はイメージや表現方法を広げる二つの組立とし、共有においてイメージや表現方法からできそうなことを広げた状態で「図工の種集め」を終え、その後は自由に表現することが効果的である。

一方、構想を深めていくことを目的とする場合は、以下の三つの活動による組立とする。児童は、「見付けたことを共有する活動」で表現の手掛かりを得た上で、再度、試す活動（「共有したことを基に試す活動」）に取り組むことで、表し方が整理され構想を深めることにつながるのである。

○　思いのままに試す活動

○　見付けたことを共有する活動

○　共有したことを基に試す活動

例えば、心に強く表したいことを持ち、構想を練って作品づくりに取り組む題材では、新たな表し方に気付いたり認識を深めたりすることで、新たな発想を加えたり自分では気付かなかった表し方を取り入れてより良くしていこうとしたりする。このような場合はイメージや構想を深める三つの組立とし、共有で得た新たな表し方や深めた認識でもう一度試したり自分の表現を見直したりする時間を取ることが効果的である。

以上のことを踏まえ図１及び次ページ図２のとおりモデル化した。

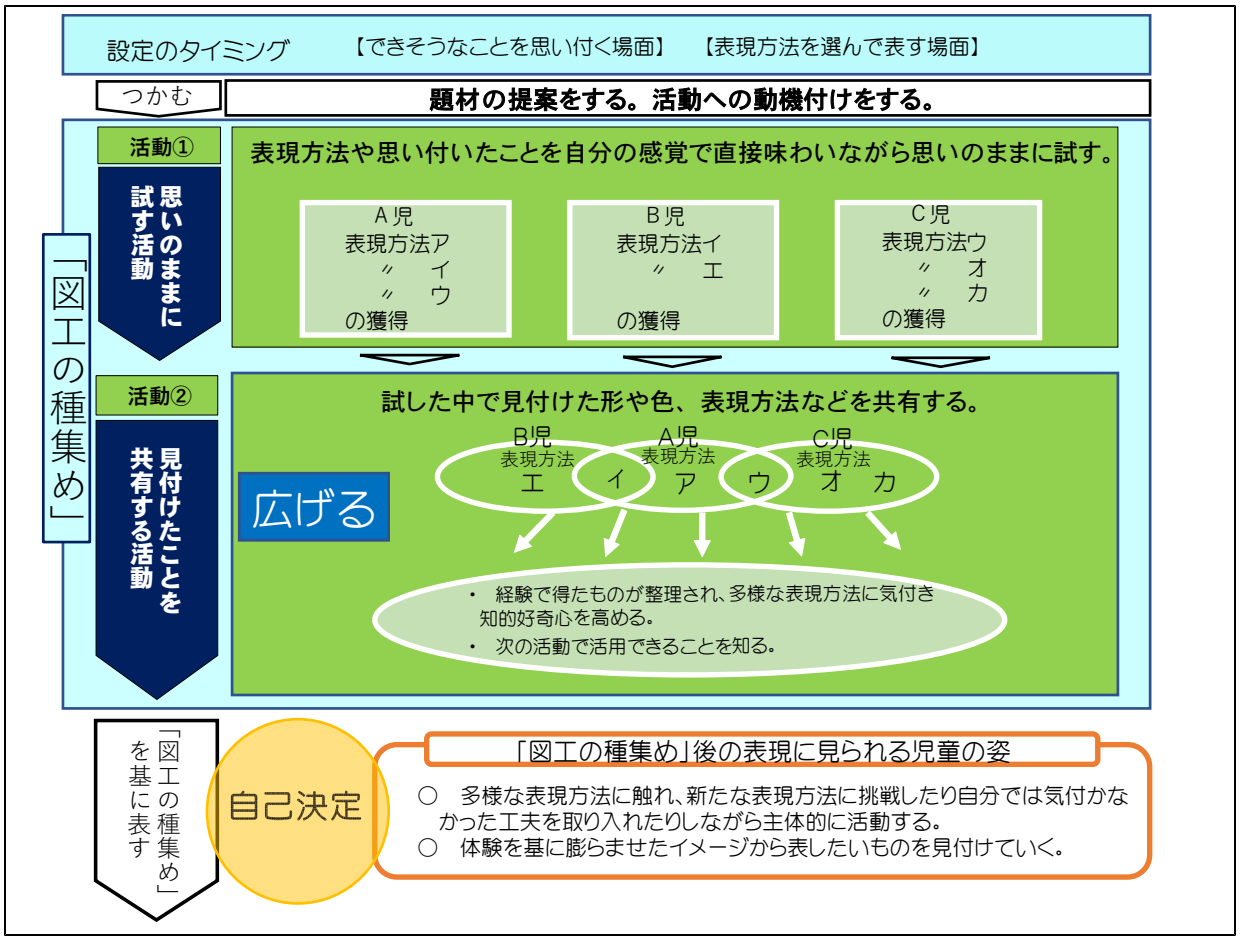


図１　二つの活動で組み立てる「図工の種集め」（広げることを目的とした場合）

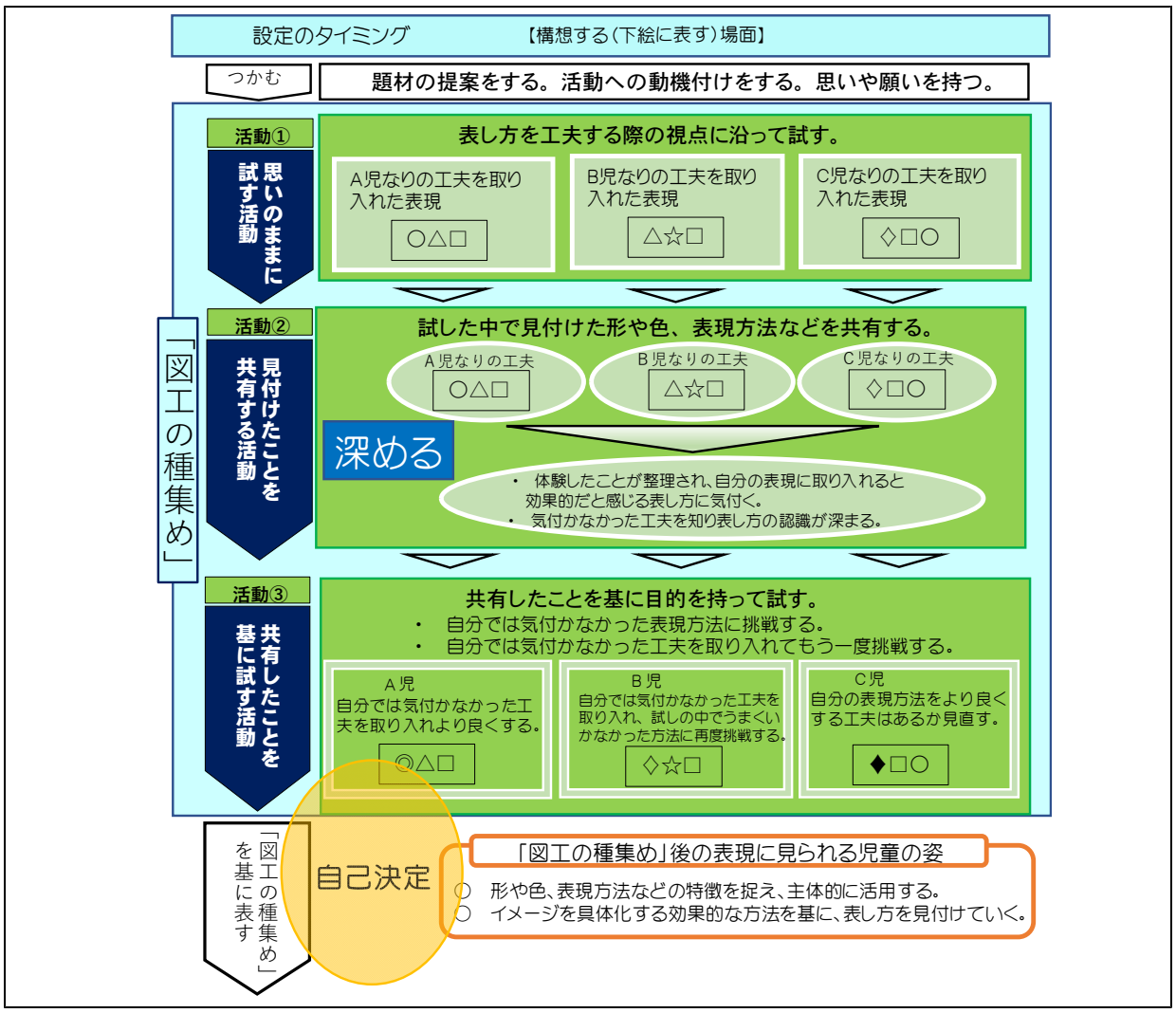
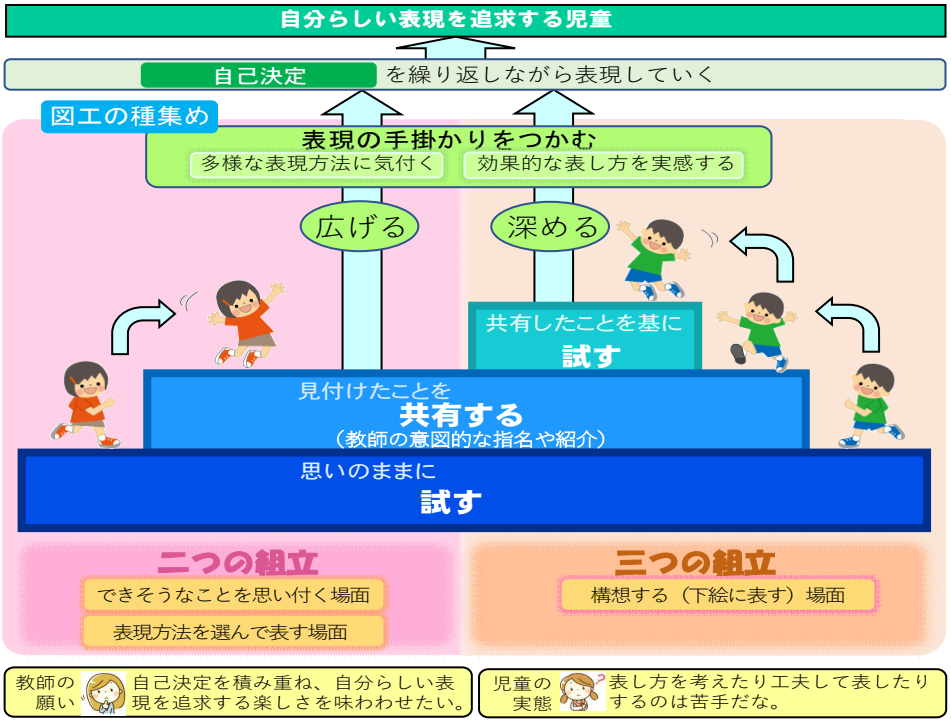


図２　三つの活動で組み立てる「図工の種集め」（深めることを目的とした場合）

２　研究構想図



Ⅴ　研究の計画と方法

1　授業実践の概要

対　象	所属校　小学校第２学年	所属校　小学校第４学年
期　間	平成29年６月23日～７月７日	平成29年10月２日～11月15日
題材名	たのしく　うつして	わすれられないあの時～運動会　あのしゅん間～
題材の目標	型紙版画の表現方法を用いて表れた形から発想を広げ、表し方を工夫して版に表す。	心に残ったことを、その時の気持ちや様子が伝わるように表し方を工夫して絵に表す。

2　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し１	思い付いたことや表現法を思いのままに試す活動を設定することは、自分の感覚で直接味わいながら形や色などからイメージを広げたり表現方法を見付けたりすることにつながったか。	・授業の様子の観察及び発話の分析 ・作品分析 ・試した表現の数 ・振り返りからの分析
見通し２	試した中で見付けた形や色、表現方法などを共有する活動を設定し情報を整理・分類することで、体験で得たものを整理し、表現方法を広げたり認識を深めたりすることにつながったか。	・授業の様子の観察及び発話の分析 ・作品分析（交流で示した視点を取り入れているか） ・振り返りからの分析
見通し３	共有したことを基に目的を持って取り組む活動を設定することは、多様な情報を基に自分の思いに近付けるために表し方を工夫することにつながったか。	・授業の様子の観察及び発話の分析 ・活動１と活動３の作品比較 ・作品分析（試しの活動で行った表現方法の取り入れ方を作品から分析） ・振り返りからの分析 ・「図工の種集め」以降の表現の様子の観察

3　抽出児童

題材名「たのしく　うつして」（第２学年　１学期）

A	真面目に活動に取り組むことができる。周りの様子をよく見ていて、確実に進めていこうとする。

題材名「わすれられない　あの時～運動会　あのしゅん間～」（第４学年　２学期）

B	真面目に活動に取り組むことができる。提示された情報を生かし着実に取り組むことができる。
C	自分の思いを持ち意欲的に活動に取り組むことができる。自分の表したいことを表現するために、表し方を考えたり工夫を取り入れたりすることが得意である。

(1)　題材名「たのしく　うつして」（第２学年　１学期）

本題材は、型紙とローラーを使い、表したいことを型紙版画に表す題材である。型紙版画の表現方法を自由に試し、見付けた表現方法を交流することで多様な表現方法を捉え、捉えたことを基に活動を進めながらイメージを広げて表したいことを見いだしていく題材である。

①　評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
型紙とローラーを使って表すことを楽しもうとしている。	ステンシル版の表し方を知り何をどのように表すか考えている。	型紙の置き方やローラーの使い方を工夫している。	作品を見せ合い、作品のよさや面白さに気付いている。

②　指導計画

時	主な学習活動	手立て
		できそうなことを思い付く場面
1	型紙を使った写し方を試す。 **〈手立て「図工の種集め」〉**	**〈二つの組立として設置〉** ・型紙とローラーでできる表現を自由に試させる。 ・気付いたことを交流させる。 ※試した方法と表れた表現方法の特徴について発表させた内容を整理し、多様な表現方法のよさや面白さを捉えられるように交流させる。
2	型紙をつくり、置く位置や色を考え工夫して表す。	・前時の作品と視点を掲示する。 ・版を刷る場、型紙を作る場等に分け、児童が活動しやすい場を設定する。
3	描き加えたり、貼り足したりして表す。	・複数の材料を用意する。 ・途中で相互鑑賞を行い工夫を取り入れられるようにする。
4	作品を見せ合い工夫した点を話し合う。	・自分や友達の作品の工夫しているところ、面白いところを伝え合う場を設定する。

(2)　題材名「わすれられないあの時～運動会　あのしゅん間～」（第４学年　２学期）

本題材は、運動会の中で自分の心に残った場面を思い出し、絵に表したい気持ちや様子が伝わるように画面の構成を考えたり表現方法を工夫したりして絵に表す題材である。

①　評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
心に残った場面や気持ちを楽しみながら絵に表そうとしている。	心に残ったことの様子を思い出し、絵に表す場面を考えている。	気持ちや様子が伝わるように材料や用具の使い方を工夫している。	表し方の工夫について話し合い、よさや工夫を感じ取っている。

②　指導計画

時	主な学習活動	手立て
1	心に残ったことから、絵に表したいことを考える。	・運動会の中で心に残った場面を話し合い共有することで、表したい思いを考えられるようにする。
	構想する(下絵に表す)場面	
2	その時の気持ちが伝わるように画面の構成を考えて表す。 **〈手立て「図工の種集め」〉**	**〈三つの組立として設置〉** ・紙人形と黒画用紙で作った短冊を使い、人物のポーズや大きさ、位置を試させる。 ・人物のポーズや大きさ、位置で整理し、効果的な表し方に気付けるようにする。 ・共有したことを基に画面構成を試させる。
3	気持ち様子が伝わるような画面構成を考えて下絵を描く。	・前時に考えた構図を基に下絵を描く時は、新たなことを描き足したりより良くするために直したりするよう促す。
	表現方法を選んで表す場面	
4	表現技法を試す。 **〈手立て「図工の種集め」〉**	**〈二つの組立として設置〉** ・複数の表現方法を試させる。 ・表現方法の特徴などを基にイメージしたことを交流させることで、どの表現方法で表せそうかを考えられるようにする。
5～8	気持ちや様子が伝わるように表現方法を工夫して絵に表す。	・抱いているイメージを形や色と関わらせ、児童の思いに共感しながら焦点化させていく。
9	表したかったことや表現のよさを感じ取り話し合う。	・自分の表したかった気持ちを表すため、工夫したところを伝え合う場を設定する。

Ⅵ　研究の結果と考察

１　題材名「楽しく　うつして」　第２学年

【「図工の種集め」を設定するタイミングと組立】

○　設定するタイミング　できそうなことを思い付く場面

○　組立　二つの組立（広げることを目的とする）

(1)　思いのままに試す活動

①　学習活動の概要

児童にとってローラーと型紙を使った型紙版画は初めて出合う表現方法である。本時は、ローラーと型紙を使ってどのような表現ができるか、実際にローラーと型紙を使って表現方法を見付けていく試しの活動を行った。まず、児童が見通しを持てるよう型紙のつくり方やローラーの使い方を教師が実演した。その後、型紙とローラーを使ってできる表現方法を試す活動を行った。

②　全体の様子

これまでの児童の実態では、自信が持てずに教師に確かめたり周りの様子を気にしたりする児童が多かった。本時の自由に試す場においても、周りの様子を確かめながらローラーを転がす児童が多く見られた。それが、型紙を剥がす時に形が現れる面白さや重ねた色の美しさを自分の感覚で直接味わうに従い、体全体を使い大きくローラーを動かして表現したり様々な色や表現方法を試そうと次々に取り組んだりするなど、児童の動きに変化が現れた。自分の感覚で直接味わう楽しさが心を徐々にほぐし、それに伴って表現方法を積極的に試す姿につながったものと考える。その結果、多くの児童が複数の表現方法を自分で見付けることができた。思いのままに試す活動で見付けた表現方法の数は、図３のとおりである。

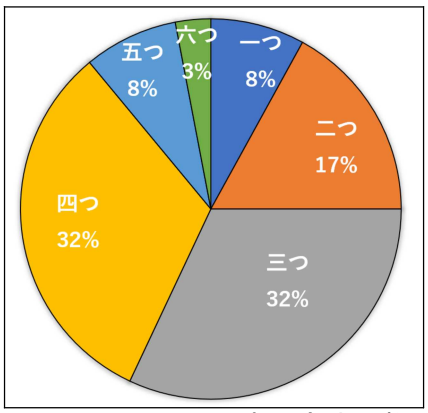


図３　見付けた表現方法の数

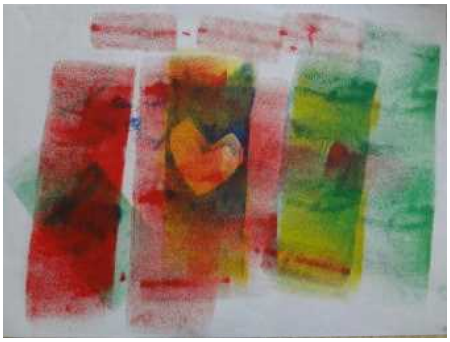
③　抽出児童の様子

思いのままに試す活動における抽出児の様子は、図４のとおりである。

図４のように新たな紙に取り組む中で、ローラーや型紙の使い方、表現方法の組合せなどに挑戦している。さらに、３枚目は画面全体のバランスや美しさなどを意識した表現へと発展している。

その際の抽出児Ａの姿として特徴的なことは、自分の感覚で表現方法を試すうちに活動がダイナミックになっていったことである。一枚目に紙から型紙を剥がして形が現れた時の表情にはできた喜びがあふれていた。２枚目に横向きに長くローラーをかける姿は伸び伸びとしており、自信や勢いが感じられた。このように、自分の感覚で味わう楽しさを感じたり表現方法を見付けて自信を持ったりしたことで、自分で考えて表現に取り組む姿へと変わっていった。

以上のように、思いのままに試す活動を設定したことは、自分の感覚で直接味わう楽しさや表現方法を見付けられたという自信を与え、そのことが心をほぐすことへとつながった。さらに、心がほぐれたことにより、それまで手掛けた表現を生かし自分なりの工夫を加えて試したり新たなことに挑戦したりするようになり、結果として様々な表現方法を見付けることにつながった。



１枚目
○教師を模倣して型紙を中央に置き表現。
○ローラーをたたいて周りに色を付ける。
（新しいローラーの使い方）

２枚目
○新しい型紙で表現。（新たな型紙）
○横に長くローラーを転がす。
（新たなローラーの使い方）
○再びハートの型紙を使って表現。（組合せ）

３枚目
○ハートの抜き型で表現。（型紙の使い方）
○バランスを考えて左上に抜き型で表現。更に、周りにも色を付ける。（画面構成）

図４　抽出児Ａの表現の過程

(2)　見付けたことを共有する活動

①　学習活動の概要

ここでは、意図的指名を行い、児童が見付けた表現方法を発表するよう促した。そして、発表された表現方法を表１のとおり四つに分類し整理していった。

②　全体の様子

表現方法が示されると「同じやり方したよ」「私もやった」という発言が見られた。このことは、体験と方法が結び付き、共有する場で得た情報を基に自らの体験を振り返ることで、漠然としていた表現方法を再認識できたことを表している。一方、形を見ながら自分が気付かなかった表現方法が示されると、驚いたり感心したりする姿が見られた。そして、形を見ながら型紙とローラーをどのように使ったのかを考えていた。活動の最後に、次の作品で取り入れてみたい表現方法について挙手させると、全員の児童が複数回手を挙げた。

このように、自分では気付かなかった新たな表現方法と出合い、多様な表現方法があることを知ることができた。そして、自分で表現方法を見付けて表すことに消極的な児童にとって、多様な表現方法が「わざ」ごとに整理され、次の活動にも生かせると感じられたことが、知的好奇心を高めたものと考える。

表１　共有で出された表現方法

型紙のわざ	・ 型紙を使って写す。 ・ 抜き型を使って写す。
ローラーのわざ	・ 長く転がす。 ・ 短く転がす。 ・ スタンプのようにたたいて使う。
置き方のわざ	・ 型紙を繰り返し並べて写す。 ・ 型紙を裏返して置いて写す。 ・ 型紙を重ねて置いて写す。
色のわざ	・ 色を変えて写す。 ・ 色を重ねて写す。

※「表現方法」を「わざ」という言葉で表した。

(3)　「図工の種集め」以降の表現と自己決定

「図工の種集め」を行ったことが、自己決定を繰り返しながら表現することにつながったかを児

童の姿及び「思いのままに試す活動」で試した表現方法と作品に取り入れた表現方法の数の比較から検証した。

ここでは、まず、ローラーと型紙を使った様々な表現方法を組み合わせて表す。次に、現れた形を何かに見立てたり色からイメージを膨らませたりして、思い付いたことをクレヨンで描き加えて作品として仕上げていく。実際には、表したいイメージを持ち型紙の形を決めて表していく児童もいれば、抽象的な形を切り抜いて表し、表現を進めていく中でイメージを膨らませながら作品を完成させていく児童もいた。

まず、児童は、自ら手掛けた型紙とローラーを使った表現を見て、ここで現れたものに何を描き加えたら面白い表現になるかを考え、次々に表現方法を付け足していった。その中で、どの色にしようか、どの表現方法にしようか、組み合わせようかと考え、判断しているのである。これが、本題材における自己決定を繰り返しながら表現していく児童の姿である。

普段は多くの児童がどのように取り組んだら良いか教師に何度も質問に来るが、本時は、自分で考えて取り組み活動に没頭していた。抽出児Ａは「図工の種集め」で試したハートの型紙や新たにつくった型紙を用いて表し始めた。「図工の種集め」では直線的だったローラーの動かし方に、曲線も生まれた（図５）。こうして、表現方法を楽しむ中で見立てを始め、イメージしたことに合わせてクレヨンで描き加えするなどして作品を完成させた。

図５　抽出児Ａの作品

この自己決定がどの程度行われたのかをつかむため、作品に取り入れた表現方法の数をまとめた。それは、異なる表現方法を取り入れたことが、それまで手掛けた表現方法を変えて新たな面白さを取り入れようと試みた自己決定の瞬間と考えたからである。児童の作品を分析したところ、思いのままに試す活動に比べて取り入れた表現方法の数が増えた児童は76人、取り入れた表現方法の数が変わらない児童は11人、取り入れた表現方法の数が減った児童は３人であった。このように児童の表現方法が増えたのは、多様な表現方法の中から自分の表したいことに合わせて表現方法を選んでいった結果と考える。

以上のことから、自己決定を繰り返しながら表現することに「図工の種集め」が有効に働いたことを確認できた。併せて、「図工の種集め」の中で、二つの心理的な作用により促進されることが明らかになった。一つは、自分の感覚で直接味わう楽しさや表現方法を見付けられた自信を持てたことである。もう一つは、見付けたことを共有する活動において経験したことが整理され、多様な表現方法に気付き知的好奇心が高まったことである。

２　題材名「わすれられない　あの時　～運動会　あのしゅん間～」第４学年

本題材では、「図工の種集め」を題材の中で二回設定する。

【「図工の種集め」一回目　設定するタイミングと組立】

○　設定するタイミング　構想する（下絵に表す）場面

○　組立　三つの組立（深めることを目的とする）

(1)　思いのままに試す活動

①　学習活動の概要

前時に一人一人が運動会で心に残った場面を思い浮かべ、表したい気持ちや様子を考えた。ここでは、表したい気持ちや様子が伝わる効果的な画面構成を考えるため、次の操作活動を設定した。

○　割ピンで関節部分が動くようにした紙人形を操作しながら、人物のポーズを考える活動。

○　黒い画用紙で作った４本の短冊を画用紙の四辺に見立てて人物の大きさや位置を試す活動。

なお、紙人形は、二人組になり友達に取ってもらったポーズを見ながら操作することとした。

②　全体の様子

最初にポーズを考え、次に大きさと位置を考えるという手順を示したことにより、児童は見通し

を持って活動に取り組むことができた。まず、友達に取ってもらったポーズを見ながら紙人形を操作し、体の傾きや腕の曲げ方、足の開き具合などを確かめていた。また、二人組で役割を交代して紙人形を操作したことで、互いにアドバイスし合いながら試行錯誤する活動へと広がっていった。

次に、短冊を画用紙の四辺に見立てて人物の大きさや位置を試す際には、多くの児童がうまくできたポーズを画面の中に全部入れたいという思いからか、人物全体を画面に入れて満足し、比較的短い時間で活動を終えた。大きさや位置については十分に試しているとは言えない状態であった。

③　抽出児童の様子

思いのままに試す活動における抽出児の様子は、図６のとおりである。

抽出児Ｂはポーズを中心に試していた。一方、抽出児Ｃはポーズや大きさ、位置を試していた。ポーズについては抽出児Ｂ、Ｃ共にじっくり試したが、短冊の操作については抽出児Ｃは大きさ、位置をじっくり考えていたのに対し、抽出児Ｂは短い時間で終えた。

以上のことから、紙人形を使いポーズを操作した活動を設定したことは、少しずつ形を動かし表したい形に近付けていくことを可能とし、何度も操作する中で思いを表す形を見付けることにつながったと考える。一方、短冊で囲い、大きさと位置を試す活動を繰り返し操作する児童が少なかったのは、大きさや位置を工夫すると表したいことを効果的に表せることに気付かなかったためと考える。

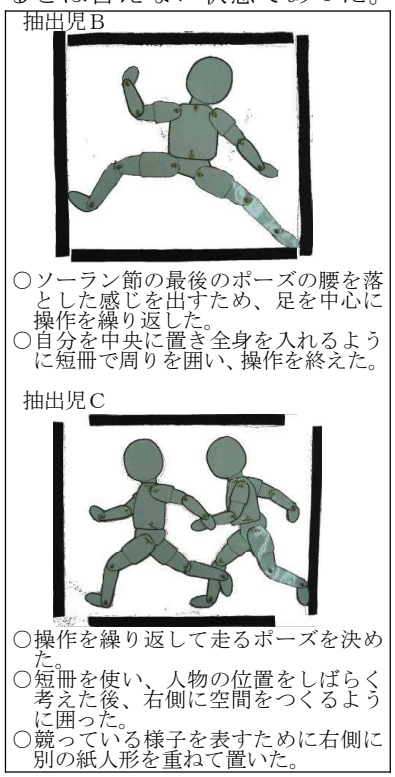


図６　思いのままに試す活動の表現

(2)　見付けたことを共有する活動

①　学習活動の概要

効果的な画面構成となっている児童を意図的に指名し、デジタルカメラで撮っておいた画像を見せながら、ポーズや画面構成で工夫したところを発表するよう促した。その上で、紹介された工夫をポーズ、大きさ、位置の視点で整理した。

②　全体の様子から

図７は、共有場面で全体に示した写真と確認した内容の一部である。

リレーでバトンをもらう場面の表現を見て「左に人物を寄せたことでリードして走り出している感じがする」という感想が出された。さらに、体の傾きを工夫する、人物の一部を画面からはみ出すように切る、人物を斜めに配置するなど、友達の様々な工夫が効果的な画面をつくり出していることに気付いていった。以上のことから、見付けたことを共有する活動を設定したことは、ポーズ、大きさ、位置を工夫すると自分が表したいことを効果的に表すことができるという認識を深めることに有効に働いたと考える。

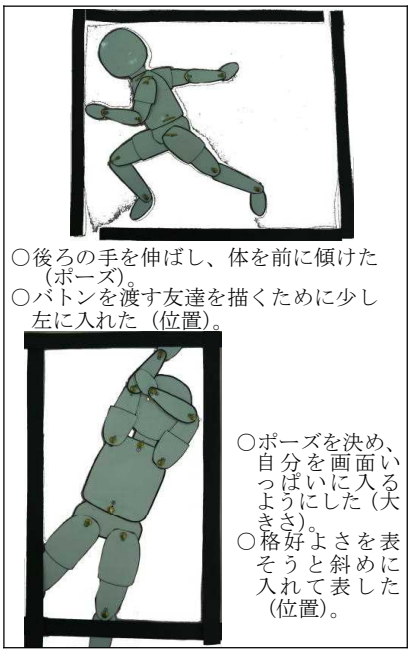


図７　共有する活動での提示作品

(3)　共有したことを基に試す活動

①　学習活動の概要

自分の表したいことを効果的に表す方法を紙人形と短冊を操作して、共有したことで気付いたことを基にポーズ、大きさ、位置の視点で見直す活動を行った。

②　全体の様子

多くの児童が思いのままに試す活動では気付かなかったことに取り組み始めた。思いのままに

試す活動において、人物の大きさや位置について短冊を使って十分考えずに、人物全体が入るように周りを囲って終わりにしてしまった児童が、一部をはみ出すように人物を大きくしたり人物を斜めに置いて躍動感を表したりし始めた。このように、思いのままに試す活動からポーズ、大きさ、位置のいずれかを変えた児童は90％であった。それは、自分では気付かなかった大きさや位置の工夫について共有を通して理解したことが、画面構成をもう一度試し始めることへと方向付けたことを表している。これは、共有の中で自分の表したいことに最も効果的な表し方を見いだし、共有したことを基に試す活動での操作を通してそのよさを実感している姿とも言える。

③　抽出児童の様子

共有したことを基に試す活動での抽出児の様子は、図８のとおりである。

抽出児Ｂはポーズを変えることはせず、枠を狭めたり広げたりして自分が表したいことを伝える効果的な大きさや位置を見付けていた。抽出児Ｃもポーズは変えず、人物二人を斜めに置き直した。

以上のことから、共有したことを基に試す活動を設定したことは、共有して得た情報の中から自分の表現に取り入れると効果的と思われる表し方を用い、自分の思いを具現化するために表現方法を工夫することへとつながった。そして、その効果を実感することができたと考えられる。これは、下絵に表すという次の活動に取り組む中で求められる自己決定を、思考としては既に行っているということである。そのため、下絵に入っても戸惑わずに取り組み始め、ポーズ、大きさ、位置を考えながら描き始めることができたと考える。

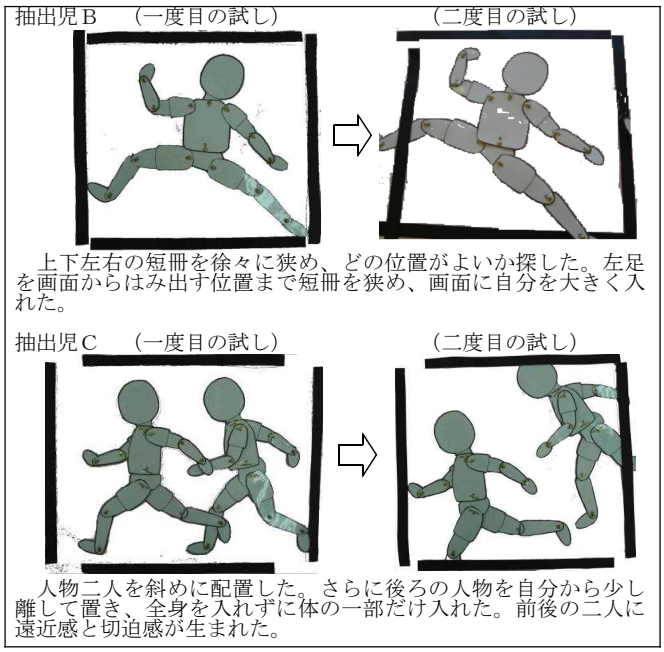


図８　共有したことを基に試した抽出児の表現

(4)　「図工の種集め」以降の表現と自己決定

①　学習活動の概要

「図工の種集め」で考えたポーズ、大きさ、位置を基に友達に取ってもらったポーズを見ながら下絵に表した。

②　全体の様子

「図工の種集め」を行ったことで、自己決定を繰り返しながら下絵に表していったかを、振り返りシートの記述と児童の姿から検証した。振り返りの結果から、自分をどのくらいの大きさにするか自分をどこに配置するかを考えることに役立ったと、多くの児童が感じていた（表２）。このことは、下絵に表し始めるとほとんどの児童が、画面のどこに自分を描いたら良いかおおよその見当を付けて描き始める様子にも現れていた。また、体がどこで曲がるのか分かったという児童が多く（表３）、紙人形を操作したことが形を捉える上で有効だったことが分かる。その後も何度もポーズを取ってもらい細部まで確かめたり描き直したりしながら下絵に表すことができた。

表２　「図工の種集め」の振り返りからの結果

どのようにすれば自分の思いが表せるか考えることに役立った。	47%
体がどこで曲がるのかが分かった。	86%
自分をどのくらいの大きさにするのか考えることに役立った。	71%
自分をどの位置に入れるかを考えることに役立った。	80%
自分の他に何を描くか考えることに役立った。	35%
下絵を描く時に役立った。	68%

表３　「図工の種集め」についての振り返りシートの記述（抜粋）

- 最初は何を描くか分からなかったけれど紙人形を使って自分が描きたいことが浮かんできて楽しくなった。
- 紙人形を使ったからどこに人を描くかポーズがどうなるかよく考えられた。
- 自分をどの位置に描くか大きさはどうするか分かった。
- 紙人形を使ったから絵が描きやすかった。
- 前に比べて下絵が上手に描けるようになった。
- 紙人形を使うと体の曲がるところが分かって絵が描きやすかった。
- 紙人形を使ったから細かい所までちゃんとでき、下絵を迷わず描けた。

③　抽出児童の様子

「図工の種集め」を基に表した抽出児の様子は、次ページ図９のとおりで

ある。

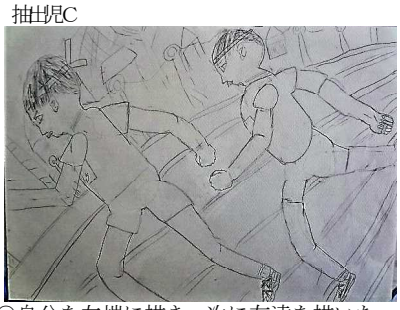
抽出児Ｂは、振り返りシートに「うでがどこで曲がるかがよく分かった。下描きがとても描きやすかった。体の形がわかりやすかった」と記述しており紙人形を操作することで形を捉えることができたと考えられる。抽出児Ｃは、振り返りシートに「自分の他に何をかくか考えるのに役立った」と記述した。自分のポーズが決まるとそこから発想を広げ、友達やコースを描き加えるなどして競争している感じが伝わるように画面をつくり上げていった。

以上のことから「図工の種集め」において、ポーズ、大きさ、位置の視点に絞って共有し、効果的と思う表し方を取り入れて構想を深めたことで、その後の表現にスムーズに取り組むことができ、そこから更に発想を広げて自己決定をしていくことができたと考える。

抽出児B

○大まかな形を描いてから手や足など細かな部分を描き込んだ。
○友達、テントを描き加えていった。

抽出児C



○自分を左端に描き、次に友達を描いた。
○トラック、テントなど周りの様子を描いた。

図９　抽出児Ｂ、Ｃの作品

３　題材名「わすれられない　あの時～運動会　あのしゅん間～」

第４学年

【「図工の種集め」二回目　設定するタイミングと組立】

○　設定するタイミング　表現方法を選んで表す場面

○　組立　二つの組立（広げることを目的とする）

(1)　思いのままに試す活動

①　学習活動の概要

自分が表したいことを伝えるための効果的な色の塗り方を考えるため、色の塗り方や道具の扱い方を試す活動を行った。筆を洗う水と色を溶かす水はきちんと分けることや、パレットでの絵の具の混ぜ方など道具の扱い方、「にじみ」「ぼかし」「タッチを生かした塗り方」の三つの表現方法を教師が実演して紹介した。その後、一人一人が三つの表現方法と道具の扱い方を試した。

②　全体の様子から

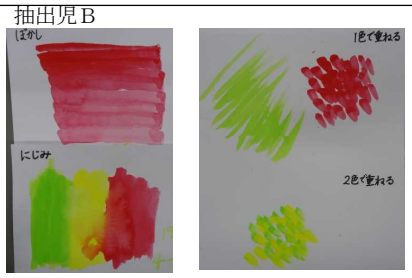
初めて知る表現方法も含まれており、一つ一つ確かめながら意欲的に取り組み、表現方法の特徴や現れる形や色の美しさ、面白さを感じていた。中には手順どおりに行っても思ったような効果が表れない場合もあった。すると、水の量を調節したり友達と教え合ったりする姿が見られた。うまくいかず試行錯誤することで、より良くするために工夫したり繰り返し挑戦してこつをつかんだりすることへとつながっていった。また、「３年生では色を重ねるこの方法で髪の毛を塗ったよ」と過去の経験と結び付けながら試す姿が見られた。一方、表現方法の特徴を感じることはできたが、自分の絵にどのように取り入れるか結び付けながら試している児童は少なかった。

③　抽出児童の様子

思いのままに試す活動における抽出児の様子は、図10のとおりである。

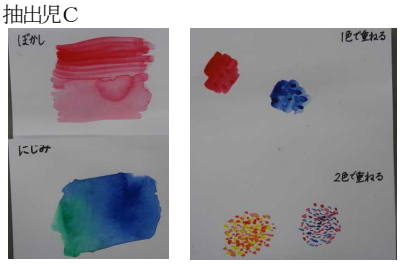
教師はにじみの実演を二色で行った。抽出児Ｂはそれを発展させ、三色使うとどのようににじむのかを確かめていた。抽出児Ｃは、水の量を調節できないと、思ったような効果が表れないことが分かり、水の量を調節しな

抽出児B



○三色を使いにじみを試した。
○タッチを生かした塗り方では、点を重ねる方法と線を重ねる方法を試した。

抽出児C



○にじみ、ぼかし、タッチを生かした塗り方の順で取り組んだ。
○二色で重ねた時は一色で重ねた時よりも点を細かくした。

図10　思いのままに試す活動の表現

がら慎重に取り組んでいた。そして、自分の感覚で確かめながらこつをつかんでいった。また、タッチを生かした塗り方では二色を細かな点で重ねると混色して見えることに気付き、点描を楽しんでいるようであった。

以上のことから、思いのままに試す活動を設定したことは、表現方法について知り、自分の感覚で確かめながら表現方法の特徴をつかむことに有効に働いたと考えられる。

⑵　見付けたことを共有する活動

①　学習活動の概要

まず、それぞれが「にじみ」「ぼかし」「タッチを生かした塗り方」を試した画用紙を持ち寄り、これらの表現方法を含め、これまで経験してきた様々な表現方法を用いて表現できそうなことをグループで話し合った。次に、グループで話し合ったことを全体で紹介した。最後に、本時で試した表現方法を取り入れている参考作品を見て効果的な取り入れ方について考えた。

②　全体の様子から

あるグループでは、青でぼかしを試したカードから「空を塗る時に使えそう」という意見が出た。色と表現方法の効果からイメージを広げていた。次に、グループで出された意見を基に全体で話し合った。二色を点描で重ねたカードから「でこぼこした感じが校庭を塗る時に使えそう」と筆跡が生み出す形からイメージを広げていた。同じく二色を点描で重ねたカードから「植物の葉っぱを表せる」と述べた児童は過去に植物をそのように表現している作品を見たことがあったからであった。過去の経験と今回の体験を結び付けたのである。最後に、複数の表現方法を取り入れて表した参考作品を提示し、作者が表現方法を取り入れた意図を考えさせた。すると「はっぴにぼかしを取り入れふんわりした感じにした」「ズボンを塗る時に筆の使い方を工夫し、しわを表した」と自分の表したいことに応じて様々な表現方法を使い分けることで、思いや願いを効果的に表せるということを理解していった。

以上のことから、見付けたことを共有する活動を設定したことは、表現方法を使うと様々な表現ができるという多様性に気付けるようにするとともに、次の表現で積極的に活用していこうという意欲を高めることへとつながった。

⑶　「図工の種集め」以降の表現と自己決定

①　学習活動の概要

表現方法を用いると様々な表現ができることが分かったが、このままでは表現方法を用いることが目的になる。そこで、改めて表したいことを確認させた上でどのような表現方法を用いると効果的に表せるか考えながら工夫して表そうと投げ掛け、表現に移った。

②　全体の様子

「図工の種集め」を行ったことで試行錯誤や自己決定を繰り返しながら色塗りを進めたかを振り返りシートと児童の活動の様子から検証した（表４）。多くの児童が色の塗り方を工夫するよさを捉えている。体の丸みを意識してタッチを生かして塗ることで立体感を表現した児童、点描のようにタッチを重ねて表現した児童、一度薄く塗ってからもう一度色を重ねて陰影を表した児童など様々であった。また、自分が取り入れた塗り方で思ったような効果が出ないと塗り方を変える姿も見られた。思いを表現するために表現方法を工夫しようとする児童の意識は振り返りの記述からも分かる（表５）。

表４　「図工の種集め」の振り返りからの結果

いろいろな色の塗り方が分かった。	96％
水の量を調節すると良いことが分かった。	78％
筆の使い方を工夫すると良いことが分かった。	81％
色の重ね方が分かった。	81％
描くものによって色の塗り方を工夫すると良いことが分かった。	81％

表５　「図工の種集め」についての振り返りシートの記述（抜粋）

- 絵の具はぬり絵みたいにぬるのだと思っていたけれどいろんなぬり方があるということが分かった。
- 色はどうやってぬったらいいかわからず困っていたのですごく助かった。色をぬるとき筆の使い方を考えながらやった。
- 色の重ね方を変えたりするといい色ができました。
- ぼかし、にじみなどを絵に取り入れることで迫力や様子が伝わってきました。
- これはすごいな他の絵を描くときにも使ってみようという気持ちになりました。
- ぼくはこれを習わなかったら絵はへただったと思います。でも、ぼかしやにじみなどを習ったからこんな上手い絵ができたんだと思いました。
- 絵で伝えたかったことが伝えられて良かった。
- 自分にもこんなことができたのかとびっくりした。

③　抽出児童の様子

抽出児Ｂは、影の部分はタッチを重

ね陰影を表現した。はっぴは濃淡が現れるように「ぼかし」を使って塗っていった（図11）。抽出児Ｃは、人物全体を薄く塗り、その上から一度色を重ねて陰影を表現した。地面、空、木はタッチを生かして色を塗った（図12）。

このように、思いのままに試す活動において、様々な表現方法を実際に体験しその効果を感じたこと、また、活動の中で見付けたことを共有する活動において、表現方法を使うと様々な表現ができるという多様性に気付き、次の表現で活用しようという意欲を高められたことが、試行錯誤や自己決定を繰り返しながら表現していくことに有効に働いたものと考えられる。

図11　抽出児Ｂの作品

図12　抽出児Ｃの作品

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　思い付いたことや表現方法を思いのままに試す活動は、自分の感覚で直接味わいながら形や色からイメージを広げたり様々な表現方法を見付けたりすることに有効に働いた。その中では、児童の心がほぐれ、知的好奇心が高まったことで活発に活動するようになり、結果として様々な表現方法を見付けたり特徴をつかんだりすることにつながった。

○　試した中で見付けた形や色、表現方法などを共有する活動を設定し情報を整理・分類したことは、実感を伴いながら表現方法を広げたり認識を深めたりすることに有効に働いた。特に試したことを共有する活動については、組立により活動の意図を明確にして設定することの大切さを確認できた。具体的には、二つの組立では多様な表現方法に気付けるようにすると良いこと、三つの組立では効果的と思われる表し方に気付けるようにすると良いことである。

○　共有したことを基に目的を持って取り組む活動は、多様な情報を基に自分の思いに近付けるために表し方を工夫することに有効に働いた。共有したことを基に表す活動は、構想を深める際に必要で、そこでは、自己決定が思考の上では既に始まり、そのことで下絵に表す活動に抵抗なく取り組むことができた。

２　課題

○　本研究は、初めての表現方法に出合う題材と思いや願いを持ってから表現に取り組む題材においての実践であった。その他の絵に表す題材においても「図工の種集め」が有効であるか継続して取り組んでいくとともに、題材に応じた「図工の種集め」の具体化を図りたい。

Ⅷ　提言

○　「図工の種集め」は、自己決定を繰り返させたい学習の手前に設定すると有効である。

○　「図工の種集めは」設定する場面の目的に応じ、組立と共有の仕方を使い分けると効果的である。イメージや表現方法を広げることを目的とする場面では二つの組立とし、共有で多様な表現方法に気付けるようにすると良い。一方、構想を深めることを目的とする場面では三つの組立とし、共有で効果的な表し方に気付けるようにすると良い。

＜参考文献＞
・福田　隆眞　福本　謹一　茂木　一司　編著　『美術教育の基礎知識』　　建帛社（2011）

＜担当指導主事＞
足達　哲也　　尾形　一美